

りびんぐらいぶず 令和元(2019)年6月第2号

「南無」と言うは、即ち是れ帰命なり

ご讃題

言南无者、即是帰命、亦是発願回向之義。言阿弥陀佛者、即是其行。以斯義故
必得往生。 (Ref 『行文類』聖典全書 宗祖篇 上 p34)

はじめに

このほど教区布教団総会で藤場 俊基師の「本願念仏と人間」と題したご講義を拝聴し、併せて同師の『親鸞に聞く観無量寿経の意』を拝読した。本願寺派にはない自由度が大谷派にはあると仄聞してきたが、観経理解の宗教哲学的 / 心理学的視座は刮目に値する。

浄土真宗の独自性、本願念仏の意義

藤場師は、浄土真宗の独自性と言っているものは、「本願念仏」をおいてはない(p118)とおっしゃった。その通りである。

本願念仏だけは、キリスト教にも禅宗にもない。

日蓮宗のお題目はお念仏に習った日蓮の創作であるが、由来する本願があるわけではない。

弥陀の本願は、名号を与えてする救いである。

どのようにしてそれが実現するかと言えば、名号を称せしめ聞かしめることによる。

聞く者が称する者になり、称しつつ聞くことによる。

第十七願と第十八願が呼応して成就する。これが浄土真宗の独自性である。

ところがこのこと自体が東西本願寺で曖昧にされてしまった。

お西では、三業惑乱(さんごうわくらん)後二百年の終息課程で称名念仏の意義が められ、お東では清沢満之の精神主義の影響から百年の間に見事にお念仏が出なくなった。清沢が日本の精神的近代化を急ぐ余り、浄土、回向、念仏を語らず、信心一つを謳い上げたことによる (Ref 令和元年5月22日 滋賀教区布教団総会での藤場師ご講義)。

藤場師はそのお東にあってお念仏の復活を主導して下さってある。

お西でお念仏の意義が められたのは、信心獲得前のお念仏は、自力の機執に陥る虞れなしとしないからというのがその理由である。第十七願をもとに衆生が称名し聞名するプロセスが教学的に明示されてこなかったからである。

三業惑乱のもとを尋ねれば、衆生の往生は、十劫正覚の昔に定まっている(因みに、お正信偈の第一首、讃阿弥陀仏偈の第一首に「弥陀成仏のこのかたは今に十劫を経たまへり」がある。) から衆生は昼寝しておれば足りるとした。「昼寝安心」と称した異安心が北陸に広がったのを憂慮した能化功存の警鐘に発する。その憂慮自体は、今日的には極めて的確であった。

お東では、「阿弥陀如来はいつどのようにして如来にお成り遊ばしたか。」「如来ましますか故に我信ずるのか」「我信ずるが故に如来ましますのか」との課題が提起された。宗教哲学的には「認識論」が「存在論」に優先するから、お東では「我信ずるが故に如来まします」に結論づけられている。

奥能登の妙好人栃平ふじさんは、その本質を突いたお領解をなさった。

「ほーぞーとわ どこにしぎゃうのばしょあるか みんな私のむねのうち
なむあみだぶつ なむあみだぶつ」がそれである。

法蔵菩薩のご修行というお育てに会い終に疑いなく念仏したときが本願成就のそのときであり、「我信ずるが故に如来ましますなり」に通じる。

「言南无者(ごんなむしゃ)、即是帰命(そくぜきみょう)」をどう読むか

南無阿弥陀仏は、ナムアマダブハとナムアマターユスとが一つになった印度の言葉である。親鸞聖人は、善導大師の六字釈をもとにして展開された。よく見れば、善導大師の六字釈は「言_南無_者」で始まっているのに対して、親鸞聖人の六字釈は「南無之言」で始まる。南無の字は、帰命であり、字訓を重ねて、本願招喚の勅命をお示し下さった大事の御自釈である。

ところが「南無之言」と頂戴するだけではどういうことになるか。

「南無」という印度の御言葉は「帰命」という意味になるんですよと頂戴してお終いにしたことになる。不肖もご多分に漏れない。これは怖いことである。

お東の藤場 俊基師は、ゼミの合間に漢和辞典で、「言」の字は、「動詞」では、「言葉をはっきりと発音していう」であり、「名詞」では「口に出していう言葉。またそのこと」との解説に接して、あることがふっと浮かんだという。

それは、「言」というのは「言葉をはっきりと口に出していうこと」というこの字の意味を当てはめてみると「『南無』とはっきりと口に出して言うことが帰命である」ことになることだった。言葉の意味を超えて、「南無」という言葉が私の口から出てくる、その事実を指して「それがそのまま帰命という出来事なのである」と云わんとしているのではないかと思いついたとおっしゃる。

善導大師の書物には「言 者」(は經典の言葉)が頻出するが、このことは、唯単に語句の意味を解釈・説明しているのではなく「仏が と説法していらっしゃることの意味は、」となる。言葉の意味のみならず、その状況で対告衆に述べていらっしゃる意義全体を善導大師は領解しようとなさっているのだということになる。

ここまで来ると、それはテキスト/コンテキストの問題だったと気付かして戴いた。經典は仏語をあらわすが、それは、文献学的なテキスト上の意味を顕すのみならず、いかなる状況(コンテキスト)下で説かれているかを彰(あらわ)しているかに思いを致さねばならなかったのだということに。

六字釈は行巻にあるから、衆生が行として方便法身に促される次元では「南無阿弥陀佛」は、声に出してはっきりと称えることが勧められていることになるではありませんか。

法蔵菩薩はいつ阿弥陀仏になるか

諸仏が咨嗟称我名するように誓われているのが第十七願であるが、願成就の前は「我名」は法蔵だから、衆生がお救いに与るまでは「南無法蔵菩薩」となる。

これでは、十劫正覚の昔に阿弥陀仏は誕生されていたとする「法の真実」と両立しない。

そこから法蔵はいつどのようにして阿弥陀仏となるかという問が生まれる。

「わが名を称せよ」とは、「私が佛になったときの名を称せよ」だからである。
南無阿弥陀佛とその名が喚ばれる前に「阿弥陀仏」という仏さまが居るわけではなかった。
仏として名を称されることで仏は佛となる。

それは救いのお目当てたる衆生一人一人のところの問題になる。

衆生一人一人は南無阿弥陀佛と称することで初めて阿弥陀仏と対面できるからである。

お東の曾我量深師に次のような御言葉がある。

「仏さまとはどのような方でありますか、

われは南無阿弥陀佛なりと名告っておられるお方であります、

その仏さまはどこにおられますか、

南無阿弥陀佛と念ずる人の前におられます」

南無阿弥陀佛と名号を称することで阿弥陀如来が私の現前に現れて下さる。

衆生(私)が「南無阿弥陀佛」と称してお救いに与る聞名のそのとき、法蔵菩薩は願成就して阿弥陀如来とおなり遊ばす。昔の先哲方はこれを「機の真実」と仰せ下さった。

一人一人の衆生が阿弥陀様の誕生に同時一体的にお救いに与ることを数々成仏(さくさくじょうぶつ)と称する(Ref 信楽峻磨『安心決定鈔講話』p33)。

そのことをいつの間にか私達は置き忘れてきたのではなかったか。

如来ましますか故に我信ずるか、我信ずるか故に如来ましますか。認識されないものは存在しない(認識論と存在論)。

衆生が称名するとき、衆生の上に勅命(お喚び声)が聞こえる現象が現れる。

法蔵菩薩は本願成就して無量寿佛とお成り遊ばす。

南無阿弥陀佛の名が称えられるとき、菩薩は如来となり、本願招喚の勅命となって衆生を喚び覚まされる。合掌。

(後書き)お名号は称えなければ働いて下さらないとの梯 實圓和上のお声が耳の底に残る。

お名号は、報身如来がおさとのままに衆生の前に働き出して下さるお姿だから、本質は法性法身でありながら、衆生が住まいする今生では衆生自身が如来の仰せのままに(大行釈でお示し下さった通りに)声に出してお聞かせに与るという方便法身の働きで衆生に相対して居

て下さるのだった。合掌。

滋賀組仏教婦人会第一回役員会 五月三十日(木)出講 at 西方寺

滋賀組総会 六月九日(日)九時半より at 専徳寺

仏教壮年会お聴聞の会 六月二日(日)二十時より

仏教婦人会例会 六月十六日(日)十九時半より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥